

オホーツク地方の草地利用と乳肉生産

— 第49回現地研究会に参加して —

安 江 健

(北大農学部)

1991年10月3日～4日の2日間、「オホーツク地方の草地利用と乳肉生産」をテーマに滝上、雄武、興部の3町村において第49回の現地研究会が行なわれた。一度も行ったことの無い小生にとって、滝上町は芝桜、雄武町はカニやホタテ等の海産物しか思い浮かばず、興部に至っては全く知らない地域である。今回の現地研究会は、そこでの畜産のありかたを見学できる絶好の機会とあり喜んで参加させていただいた。10月31日12時30分、上川駅に集合した参加者31名を乗せたバスは滝上町に向け出発。時あたかも紅葉真っ盛りの季節である。標高1,558mの天塩岳を中心とする天塩岳道立自然公園の見事に彩られた山間をぬってバスは滝上町役場に到着。美術館かと思誤るほど立派な役場会議室において滝上町の農業についての説明を受ける。いよいよ現地研究会の始まりである。

今回の現地研究会見学行程は次のとおりであった。

10月3日 滝上町：肥培かんがい実践農家
(長屋牧場)

4日 雄武町：大規模草地肉牛肥育センター
乳肉複合経営農家
(宿野部牧場)
畜産技術センター

興部町：生産、加工、販売の一貫経営酪農家(ノースプレインファーム)

1. 滝上町における農業と肥培かんがい

滝上町は北海道の北東、網走支庁管内の西部に位置する人口4,647人の小さな町であり、天塩岳に源を発する渚滑川、ザクルー川、オシラネップ川等の各流域部を農業適地として、てん菜、小麦等の畑作と稲作、酪農が従来より営まれてきた。しかし牛乳の生産計画や水田の永久転作等により、近年は急速に畑地化が進み、現在は畑作中心の農業体系となりつつある。しかし気象条件が厳しく、年間降水量が800mm前後、5月～9月の降水量が500mmと寡雨地帯である。とともに低地は礫質土、丘陵地は重粘性土と極めて干ばつになり易い土地条件であることから、近年は畑地かんがい導入による生産性の向上と安定を図っている。これらの農業事情の中で、畑地かんがいの一方式である肥培かんがいシステムの研究、開発が精力的に行なわれており、数戸の酪農家においてスラリー活用システムが試験的に導入されていた。これらの酪農家の内、長屋牧場を我々は見学させていただいた。

<長屋牧場>

当牧場の肥培かんがい施設の特徴は糞尿分離と搬送が一体化した「シリンダー押し出し分離方式」(元祖滝上方式またはモグラ方式とも呼ばれる)にあり、3年間に渡る地上試験の末、昨年埋設、設置されたとの事である。小生自身この様なスラリー活用システムを見学したのは初めてのことであり、まず従来の糞尿処理の農家に比べ堆肥盤周辺部が非常に衛生的である事



写真1. 長屋牧場の糞尿分離部
中央部に本システムの特徴であるシリンダーが見える。



写真2. 長屋牧場の堆肥盤
堆肥が地面から盛り上がって来るところから別名モグラ方式とも呼ばれる。

に驚いた。また当牧場主である長屋栄一氏は、導入に際して国内、外を視察され、さらに当牧場の経営内容および畜舎構造の点から、従来より計画されていたローラープレス方式に変わる新しいシステムの検討を行なった結果、現在の方式を取り入れたそうである。これらのスラリー活用システムもちろんの事、とすれば軽視しがちな糞尿を「いかに自分の経営に生かしていくべきか」と真剣に取り組んでいる長屋氏の姿勢に深い感銘を受けた。結構堆肥盤にスラリーが混入している様な気がした点と、本当に配管

内で詰まったりしないのかという疑問点を除けば、この方式は堆肥盤等の施設配置を自由を選定できるため、畜舎周辺環境や住居の周辺環境の衛生面においては非常に効果的であるように感じた。また近年急速に問題視されてきた環境汚染に対する酪農家の回答の一形態として、これらスラリー活用システムは非常に有効であるものと思われた。今後これらのシステムを農家規模で普及していくためには、当然システム導入による経済効果が明確でなければならない。この回答は「化学肥料代の節約がどこまで可能となるのか」といった具体的な結果も含め、今後滝上町が1つのモデル地区となって明確にしてくれるものと考えられ、その結果が非常に興味深かった。ノズル部に石が詰まったとの事で残念ながら圃場への散布状況は見学できなかったものの、スラリー活用システムを初めて見学した小生にとっては非常に有意義な見学であった。

2. 雄武町における乳肉生産

雄武町は北海道の東北、網走支庁管内最北端に位置し、直面するオホーツク海の影響を大きく受けるため、その気象条件は極めて厳しい。また土壌はほとんどが重粘性土という土地条件から、開拓以来酪農専業による生産性の拡大を図ってきた。また昭和54年度に設定された「乳用種、肉専用種による肉用牛振興計画」に基づき乳用雄子牛の利用と黒毛和種牛の導入による肉用牛飼養農家の育成を行なった結果、酪農家、肉用牛飼養農家ともに大型経営規模に発展してきた。しかし近年における牛乳の需給不均衡や牛肉の自由化および価格の不安定等の情勢に対抗する方策として、豊富な草資源を最大限に生かした低コスト生産を目的とした畜産システムの確立を目指し、粗飼料利用性の高いアンガス

種を肉専用種とした乳肉複合経営を推進しようとしている。この様な背景から、雄武町では畜産農協がアンガス種、ホルスタイン種雄子牛およびこれらの交雑種を主とする大規模な肥育牧場および安定的なアンガス種の肥育素牛確保のための繁殖牧場を直営している。今回はこれら畜産農協直営牧場の内、大規模草地肉牛肥育センターを見学し、次いで当肥育センターに肥育素牛を出荷している乳肉複合経営農家を見学させて頂いた。

<大規模草地肉牛肥育センター>

海岸線を走る国道 238号線（通称オホーツクライン）を北上。雄武町の郊外、オホーツク海を見おろす小高い丘陵地に当センターが広がる。アンガス種、ホルスタイン種雄子牛およびこれらの交雑種 1,614頭が6名（内正職員は2名）の管理者により、135haの草地と8棟の肥育舎を用いて育成、肥育されていた。当センターの運営システムは、同畜産農協直営の繁殖牧場や農家から離乳後のアンガス種（体重約 250kg）を買入れ、放牧主体による後期育成後、濃厚飼料主体により肥育し、体重約600~650kgで仕上げるそうである。また酪農家から乳用雄子牛をメレ子で買入れ、人工乳哺育-放牧主体育成-肥育を一貫して行なっている様であった。飼養

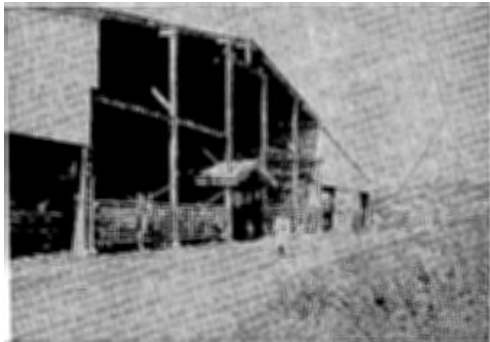


写真3. 大規模草地肉牛肥育センターの肥育舎
屋根が二重になっており、屋根部を後から増設したのがわかる。

管理上の問題点として畜舎等の設備が古く、飼養頭数の拡大に対応しきれず、とにかく肥育牛の回転を早めないといけないのが現状であると。またこの大規模飼養にわずか6名の管理者で本当に対応し得ているのか小生には疑問であり、日常管理のみで手いっぱい、飼養方法の改善等を検討している余裕が無いのが正直なところだろうと思う。当町の基本方針である乳肉複合経営による畜産システムの確立を考える時、各農家で生産される肥育素牛の受け皿として当牧場が果たす役割は今後ますます大きくなる事が予想され、もう少し飼養管理の効率化や省力化を含めた飼養方法の改善が模索されるべきではないだろうかというのが小生の正直な感想であった。

<宿野部牧場>

肥育センターを後に、国道 238号線にもどり再び雄武町市街に向かう。途中国道沿いの放牧地にアンガス牛の一群が放牧されているに出くわす。真っ青なオホーツクの海を背景に草を食べるアンガス親子をしばし車窓より眺めるうち、バスはその放牧地ゲート前で止まった。ここが次の見学先、宿野部牧場の放牧地であった。宿野部牧場は搾乳牛64頭を中心とした乳用牛92頭、さらに肥育素牛生産を目的に繁殖基礎牛54頭を



写真4. 宿野部牧場の放牧地
11月の降雪期までこのアンガス牛は放牧されている。

中心に現在90頭のアンガス牛を飼育している乳肉複合経営農家である。当牧場のアンガス牛は素牛生産を目的としているため、夏季は放牧のみ、冬季はパドックで乾草のみの飼養であるという。海岸付近という当牧場の立地条件を考えた場合、当地での厳冬期の気象条件はさぞ厳しいものであらうと思われ、見学者からも冬季パドック飼養の是非について質問が出されたが、宿野部氏によると分娩時にのみ注意すればほとんど問題は起こらず、これがアンガス牛飼養の最大の良さであるとの答えであった。時間の関係上放牧地においておおまかな飼養形態等を伺ったのみで、牛舎等の施設についての見学はできなかった。そのため乳用牛の飼養方法や、乳肉複合経営による利点や問題点等を詳しくお聞きする事ができなかったのは残念であったが、宿野部氏の「愛情をかけて手をかけない」という哲学や、「今後何があるかと私は生き残れる自信があります。」との言葉の裏に、それを支えるひたむきな努力と姿勢を見た様な気がした。

<畜産技術センター>

当センターは農業者ならびに農業関係者の研修センターであると同時に、生乳の検査・分析や土壌分析、飼料分析を行い、これらの結果を乳検成績と組み合わせた情報として農家に提供するための情報収集・処理の場でもある。年間に生乳68,000点、飼料3,000点、土壌1,000点にも上る膨大なサンプルを検査・分析し、各農家の成績と照合して解析を行なっている。またこれらの解析結果等を情報処理システムを用いて各酪農家がいつでも入手可能となるシステム開発を進めてきており、昨年度は新たに当センターにホストコンピューターを導入すると同時に、各農家個別の経営アドバイスが可能となる様なシステム開発も完了し、現在稼働中との事であった。当センターは農協、畜協、共済によ

り維持・運営されているが、「これら農業情報処理システムに対する農家の反応は？」との質問に対して、「はっきりいってまだまだこれからです。」とセンター側の答えはあまりはかばかしいものではない。これは、優良農家はこれらのシステムを積極的に活用するが、経営事情の悪い農家はほとんどこのシステムを活用せず、本来の目的であった経営事情のおもわしくない農家の経営改善に今ひとつ活用できていないためだそう。当センターの方がおっしゃられるこれら農家の姿勢の差をどの様に埋めて行くかという課題は、決して雄武町だけのものではなく道内各町村における今後の大きな課題の一つであると強く感じた。

3. 興部町における生産・加工・販売一貫経営酪農家

<興部町ノースプレインファーム>

雄武町での見学を終了し、我々は帰路について。途中、隣町である興部町において生産、加工、販売の一貫経営酪農家であるノースプレインファームを見学した。当牧場では主人の大黒氏が酪農学園大学を卒業後、御両親の牧場を継がれる際、「自分ならではのチーズ、バターを生産、販売したい」との考えから現在の様な一



写真5. ノースプレインファームの販売所参加者全員で記念撮影。中央が当牧場主の大黒氏。

貫経営酪農を目指されたそうである。現在90頭の搾乳牛から生産される生乳を、チェダーとゴーダの中間チーズや発酵バター等に加工、販売。これらの工程を5名の職員で行なっているとの事。評判の方も良いようで、原料乳の生産が追いつかない様であった。小生も買って帰ったチーズを後日試食してみたが、少しほろ苦さの残る味とセミハードタイプの舌ざわりはなかなか日本人好みの味ではないだろうかと感じた。販売は宅配が中心でまだ地元販売が中心ではあるが、北見にも事務所を設けたとの事であり、販売経路の拡大にも張り切っておられる様であった。興部町の酪農事情等について聞く機会は無かったが、当牧場の様に農家自身が夢を持って試行錯誤を続けているというだけでも、またすばらしいことであると思った。

4. 現地研究会を終えて

今回の現地研究会のテーマは「オホーツク地



写真6. 滝上町の「虹の橋」

廃線となった国鉄の鉄橋を改造し町づくりのシンボルに。町のテーマは「童話の国」だそうである。

方の草地利用と乳肉生産」であった。一口に「オホーツク地方」と言っても内陸部や海岸部でもその気象や土地条件は大きく異なる。またそれに伴い農業の中での畜産業の位置づけもおのずと異なっていた。今回見学した町村でも、畑作中心である滝上町では堆肥生産としての畜産業の位置づけが強く、一方古くから酪農専業地域として発展してきた雄武町では乳肉複合経営による畜産システム確立を目指し、肥育素牛の受け皿である肥育センターや経営改善のための情報処理システムの運営を、農協、畜協および共済が一体となって精力的に行なっていた。また滝上町では農業人口の減少を食い止めるべく新規就農者や農業実習生に対するの援助を行なうと同時に、町づくりのシンボルとして2億円をかけ「虹の橋」を建設したり、役場を美術館風のつくりにししたりと、農業だけでなく「町づくり」にも懸命であった。興部町のノースプレインファームにしても、この様な形でそれぞれの農家が夢を追って行けるのなら、それがいづれ興部町の大きなオリジナリティの1つになると思う。地域社会の中で農家と町が共に「自分達の町」を発展させていこうとする姿勢は、学究の徒である小生にとって大きな指針となった様な気がする。

旭川へ向かう帰路。燃えるような紅葉の中に、雪を頂いた旭岳が突如表れた。これから厳しい季節が訪れるのだろうが、「自分達の町」、「自分達の農業」を真剣に考えているオホーツクの人々にとって、厳しい季節はそう長くはないのではあるまいか。